2025年度（第50回）学術研究振興資金　学術研究報告

学　校　名	**昭　和　女　子　大　学**	研究所名等	
研 究 課 題	モンゴルのシルクロード遺跡に関する学際的研究 ードグシヒーン・バルガスを中心にー	研 究 分 野	文　　学
キーワード	①シルクロード　②ドグシヒーン・バルガス遺跡　③学際的研究　④モンゴル　⑤文化遺産　⑥復元　⑦保護　⑧アーカイブ		

〇研究代表者

氏　　名	所　　属	職　　名	役　割　分　担
ボルジギン・フスレ	昭和女子大学国際学部	教　　授	研究代表者・総括

〇研究分担者

氏　　名	所　　属	職　　名	役　割　分　担
二　木　博　史	東京外国語大学	名誉教授	歴史学的研究・評価
松　川　　節	大谷大学社会学部	教　　授	文献学的研究・評価
友　田　博　通	昭　和　女　子　大　学	名誉教授	データ分析、メタバース化
U.エルデネバト	モンゴル国立大学科学カレッジ	教　　授	発掘調査
J.オランゴア	モンゴル国立大学科学カレッジ	教　　授	アーカイブ構築
Ch.アマルビレグ	モンゴル国立大学科学カレッジ	非常勤講師	実践、データ分析
A.ゾルジャルガル	モンゴル国立大学科学カレッジ	助　　教	実践、発掘調査
B.ダシドルジ	モンゴル国立大学科学カレッジ	研　究　員	実践、発掘調査
E.ビルグーン	モンゴル国チンギス・ハーン文化遺産研究所	研　究　員	実践、データ分析
烏　　敦	内モンゴル師範大学地理科学学院	教　　授	歴史学・考古学データのGIS化
李　　哲	内モンゴル大学民族学と社会学学院	准教授・副学院長	衛星リモートセンシングの解析
黒　　龍	大連民族大学民族史研究所	教授・所長	歴史学的研究

モンゴルのシルクロード遺跡に関する学際的研究
－ドグシヒーン・バルガスを中心に－

1. 研究の目的

本研究は、日本の研究者を中心に、多国、多分野にわたる豊かな経験を有する専門家の協力の下に、歴史資料の収集と分析、現地での遺構の発掘調査の成果及び地理情報システム（GIS）と衛星リモートセンシングにより得られたビッグデータを基礎に、多様な要素によって構成されたモンゴル国ウムヌゴビ県ドグシヒーン・バルガス遺跡の歴史的・社会的・文化的空間および現代史的表象を、歴史、考古、文化遺産の研究者が学融合的研究を行って解明し、再構築しようとするものである。主に、同遺跡を対象に現地調査を行い、その全貌を明らかにする。その上で、モンゴル帝国の遺跡ドグシヒーン・バルガスの文化遺産としての位置づけを試み、その保護と復元に努め、モンゴル国における歴史的文化遺産の研究と持続可能な保護の基盤を創成する。

今回の研究は、歴史学、考古学、文化遺産学の分野に分断されてきた調査・研究を一つの展望の下に生産的に統合することに特別の意義がある。具体的には以下の四つの柱を基本にして行う。

１.モンゴル国ウムヌゴビ県ドグシヒーン・バルガス遺跡を対象に現地調査を行い、同遺構の歴史像を時間軸と空間軸の双方から考察、検討し、その全貌を明らかにする。

２.モンゴル、中国、日本、台湾等の国と地域の諸図書館、文書館に所蔵される歴史的記録等の史料に対する分析の成果と上記遺構の発掘調査の成果及び地理情報システムと衛星リモートセンシングにより得られたビッグデータに基づいて、ドグシヒーン・バルガス遺跡の歴史的・民俗的・文化的景観、その時代ごとの特徴と性格、及び現代史的表象を解き明かす。

３.「ドグシヒーン・バルガス遺跡アーカイブ」（資料・地図・映像・GIS・3D データ）を構築し、メタバース化する。

４.同遺跡の保護と復元に向けて、同遺構の歴史学・考古学・文化遺産学等様々な分野の課題を明確にし、その文化遺産学的価値と位置づけを試みる。

2. 研究の計画

プロジェクトの中盤、すなわち 2025 年度には、研究代表者と研究分担者が、ひきつづき上記の四つの基本コンセプトにもとづき、モンゴル、中国で現地調査を実施し、研究を深め、中間成果をまとめ、モンゴル帝国のシルクロード遺跡ドグシヒーン・バルガスの歴史的・社会的・民俗的景観を明らかにし、その復元と保護につとめる。

具体的には、資料調査を実施するほか、ドグシヒーン・バルガス遺跡及びその周辺の関連遺跡で再調査を行い、史料、発掘調査の成果、出土遺物の C14 放射性元素による年代測定、地理情報処理と衛星リモートセンシングにより得られたビッグデータなどをもとに総合的に分析する（主として研究代表者ボルジギン・フスレ、研究分担者の U.エルデネバト、B.ダシドルジ、烏敦、李哲、A.ゾルジャルガルが担当）。そのうえで、ドグシヒーン・バルガス遺跡の時代ごとの特徴と性格を明らかにするとともに現代史的表象について検討する（主として研究分担者の二木、J.オランゴアが担当）。同時に海のシルクロード・ホイアンの経済の大きな基盤となっている観光、住民の生活とのバランスを取りながら文化財の保存が成功した経験をいかし、陸のシルクロード・ドグシヒーン・バルガスのメタバース化を試みる（主として研究分担者の友田、Ch.アマルビレグが担当）。また、ドグシヒーン・バルガス遺跡の復元と保護に向けて、同遺構が文化遺産としてどのように位置づけ可能であるかについて検証する（主として研究分担者の松川、黒龍が担当）。

さらに、在モンゴル日本大使館等の協力を得て、ウランバートルで国際シンポジウム「21 世紀のシルクロード研究――モンゴルからのアプローチ」を開催し、これまでの研究成果を公表する。その成果は論集『モンゴルと東北アジア研究』Vol.11（2026 年 3 月）、『日本モンゴル学会紀要』No.55（2026 年 3 月）に収録する予定である。

3. 研究の成果

2025 年度に、研究代表者はひきつづき研究目的に沿って、日本の国会図書館やモンゴルの国立中央文書館などの諸文書館、図書館で資料調査を実施し、モンゴルのシルクロードと関係する資料を収集し、整理した。

モンゴル国立大学科学カレッジと昭和女子大学の共同現地調査隊は、2025 年 8 月 17 日から同月 27 日までウムヌゴビ県ツォグトオボー郡のボル・テーグ村にあるドグシヒーン・バルガス遺跡で発掘調査を行ったほか、同遺跡の近くのテールミーン・トルゴイとフフトルゴイン・ヘレム遺跡で考古学探査を行い、重要なデータを収集できた。また内モンゴル大学リモートセンシング考古実験室とデジタル遺産実験室の調査チームがドグシヒーン・バルガス遺跡に対するドローン・リモートセンシング調査を行った。このほか、研究代表者は、シルクロードの重要な町である中国の内モンゴル自治区トクトフ県の城圀圖（モンゴルのシルクロード遺跡、中国国家文化財)、ホリンゲル県の古城子（モンゴルのシルクロード遺跡）等で現地調査をおこない、重要な資料を収集した。さらに、2025 年 9 月 1 日にウランバートルで国際シンポジウム「21 世紀のシルクロード研究――モンゴルからのアプローチ」を開催し、日本とモンゴル、中国の研究者 22 名（共同発表も含む）により、12 本の報告がなされた。国内外 100 名余りの研究者や大学生、大学院生等が参加し、反響は非常に大きかった。同シンポジウムについての記事が、現地の『ソヨンボ』紙や『オラーン・オドホン』紙に掲載されたほか、TV9、Zogii.mn でも報道され、渥美国際交流財団のかわらばん、モンゴル国立大学等のホームページにも紹介された。本シンポジウムの成果をまとめた論文集は 2026 年 3 月に刊行された。また、『日本モンゴル学会紀要』第 56 号（2026 年 5 月）は同シンポジウムについて紹介した。

以下の知見を得た。

第一に、ドグシヒーン・バルガス遺跡では、計 4 か所で試験的発掘を行い、貯蔵用大型陶器が含む陶磁器や土器、鉄器、銅器の破片、装飾品、唐、宋、金、西夏等の時代の貨幣などが多数発見された。また同遺構における居住区では数多くの大小の建築とその中央を走る大通り、冬季・夏季を問わず人が住むことのできる火炕を備えた建物、農作業用の設備や区画が確認された。採集された動物の骨による C14 による放射性炭素年代測定の結果は、モンゴル帝国時代のものであることを示している。

第二に、ドローン・リモートセンシング調査では、ドグシヒーン・バルガス城址及び周辺の景観を対象に、約 1.65 平方km（南北 1.1km、東西 1.5km）に及ぶ範囲で 1920 枚の航空測量画像と約 2 億 600 点のレーザー点群データを獲得するとともに正射画像（DOM)、数値標高モデル（DEM)、3D モデル及び点群データを作成した。ドグシヒーン・バルガス城址は初めて系統的にして精密なデジタル化記録を獲得し、同遺跡の空間形態と配置の特徴を知るための信頼できる基礎的データが提供された。これらのデータに対する分析の結果は、地表の遺構の保存状況が良好ではなく、微地形起伏もはっきりしない環境において、高解像度正射画像が壁体の痕跡、構造と堆積差異等を識別する点において明らかな優位性を有していること、レーザーレーダーが地物の除去と地形背景の表現の点で必要となる補完を提供したことを明示した。二種のデータの総合的分析によって遺跡の地表構造の特徴が完全に表現されるとともに、さらに城址の場所選択と地形条件との緊密な関係も提示した。調査結果は、遺跡が比較的高くかつ地形の安定した台地と緩やかな斜面の区域に多く分布し、典型的な地形適応の策略を体現しており、モンゴル南部地域の都市システム、集落の構造及びその社会組織を理解するのに一定の意義を有することを示した。

第三に、ドグシヒーン・バルガスは、モンゴル帝国とその後の時代にカラコルムへキャラバンが往来する通商路の要衝の一つであったと考えられる。キャラバンは、モンゴル帝国期以降も長期間、ドグシヒーン・バルガスを使用していたとみなしてよい。

4. 研究の反省・考察

2025 年度のドローン・リモートセンシング調査によって、ドグシヒーン・バルガス遺構の築造年代と繁栄年代ならびに役割と用途に関する学術的原資料を整備できた。しかし、地表の遺構の保存状況が良好ではなく、城の壁体がほぼ消失しており、微地形起伏もはっきりしない環境において、出土した遺物の分類、文様・形態特徴の抽出、城郭の空間構成、建築配置の実態解明を行うには、克服すべき課題が多く残されている。

これから、発掘調査で出土した陶磁器、土器、銀製品、銅器、鉄製品、鉄素材片、石器、骨

器、煉瓦、装飾品、馬具、車輌の部材、貨幣等について、画像・寸法・材質・文様・出土位置等のデータベースを構築する必要がある。

また、現在では壁体がほぼ消失している城郭について、地理情報システム（GIS）、ドローン・リモートセンシング測量データ、発掘の成果、既成研究を統合し、考古学・歴史学・文化遺産学という学際的研究によって、城郭及び内部の石積みの整った基礎をもつ建築遺構、居住空間に隣接した家畜管理や乳製品加工のための附属施設、井戸及び水路などから構成される城郭及び建築物、空間構造の復元モデルを構築する。

これらの内容の検討を進めるためには、さらに長期間の取り組みと、多数の裏付け資料の収集・研究が必要であることは言うまでもない。

5. 研究発表

(1)学会誌等

①U.エルデネバト、ボルジギン・フスレ、B.ダシドルジ、J.オランゴア「“モンゴルのシルクロード遺跡に関する学際的研究――ドグシヒーン・バルガスを中心に”プロジェクト2025年度現地調査隊報告」（『モンゴルと東北アジア研究』Vol.11、pp.3-50、2026年3月）

②У.Эрдэнэбат, Боржигин Хүсэл,Б.Дашдорж,Ж.Урангуа. “МУИС, Японы Шова Эмэгтэйчүүдийн Их Сургууль 2025 онд Дугшихын балгасанд ажилласан Археологийн шинжилгээний үр дүнгээс”, *Монголын археологи-2025*, 226-232, 2025.(U.Erdenebat, Husel Borjigin, B.Dashdorj, J.Urangua. “Interdisciplinary Research on the Remains of the Silk Road in Mongolia: With a Focus on Dugshikhyn Balgas: Survey Report of the Field Survey Team in Mongolia (2025)”. *Mongolian Archaeology 2025*, 226-232, 2025.)

③李哲、白満達「モンゴル国ドグシヒーン・バルガス城址のドローン・リモートセンシング考古探査」（『モンゴルと東北アジア研究』Vol.11、pp.51-64、2026年3月）

④烏敦、劉雨婷「CNKI掲載文献に基づく近十年（2015～2024年）における集寧路古城遺跡研究の進展」（『モンゴルと東北アジア研究』Vol.11、pp.81-86、2026年3月）

(2)口頭発表

①ボルジギン・フスレ「ドグシヒーン・バルガスに関する文献研究」（第18回ウランバートル国際シンポジウム「21世紀のシルクロード研究――モンゴルからのアプローチ」、ウランバートル、2025年9月1日）

②U.Erdenebat, Husel, B. Dashdorj, “Interdisciplinary Research on the Remains of the Silk Road in Mongolia: With a Focus on Dugshikhyn Balgas: Survey Report of the Field Survey Team in Mongolia (2025)”, (Organizers: Department of International Studies, Faculty of International Humanities, Showa Women's University, Sekiguchi Global Research Association (SGRA), Atsumi International Foundation, Department of History, School of Arts and Sciences, National University of Mongolia), Ulaanbaatar, Mongolia, 1th September, 2025.

③Hiroshi Futaki, “The Dzungarian Gate, ruled by the Oyirads in the 17th and 18th centuries : a Key Point on the Silk Road”, The 18th International Symposium in Ulaanbaatar “Silk Road Studies in the 21st Century: Mongolian Approaches”, Ulaanbaatar, 1th September, 2025

④J. Urangua, “Oral History of the Ruins of Dugshikhyn Balgas”, The 18th International Symposium in Ulaanbaatar “Silk Road Studies in the 21st Century: Mongolian Approaches”, Ulaanbaatar, 1th September, 2025

⑤Li Zhe, Bai Manda, “Archaeological Survey of the Dugshikhyn Balgas Site in Mongolia via UAV Remote Sensing”, Ulaanbaatar, 1th September, 2025

⑥Wudun, Liu Yuting, “Research Progress on Jining Road Ancient City Site in the Past Decade (2015-2024) Based on CNKI”, Ulaanbaatar, 1th September, 2025

⑦U.Erdenebat, Husel. Borjigin, et al., “Archaeological Research Report on the Work Conducted at Dugshikhyn Balgas in 2025”, The 2025 Mongolian Archaeology

Academic Conference, 20-21th, December, 2025

(3)出版物

なし